

物語の共有・社会的正義・幸福感：
18世紀英文学と個人の記録から

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00027303

令和 元 年 6 月 1 8 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02296

研究課題名（和文）物語の共有・社会的正義・幸福感：18世紀英文学と個人の記録から

研究課題名（英文）Sharing One's Stories, Justice and Happiness in Eighteenth-Century Writings

研究代表者

鈴木 実佳（Suzuki, Mika）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40297768

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000 円

研究成果の概要（和文）：出版物と、出版を意図しない個人の記録の両方を使って、18世紀に際立って用いられた個人の人生の経緯を伝える語りとそれが要求する社会的正義に着目し、行為と理念と感情の焦点となる人生の物語と、正義の価値観のレトリック分析を試みた。用いた資料は、英文学作品と、交わされ、そして残された手紙などであり、出版物と手稿資料の綿密な分析に基づき、個人の経験とそれを共有しようとする志向に関わる視点をもって、現代にも通ずる問題を取り扱うことができるように努めた。社会的正義の感覚と幸福感を主軸に、物語の共有のしかた、それが行われる場（手紙、家族に残す手稿本、茶を介する場、娯楽庭園など）をとりあげることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代文学研究、学際的研究に、アーカイブでの18世紀19世紀記録資料の詳細なリサーチに根差した実証的な成果を加えることができる研究だったと認識している。20世紀前半の日本人知識人のジョンソン観を導入することで、隔絶した18世紀に埋没するのではなく、境界を越えて広がり継続性をもつ要素を意識するものとなった。また、書物市場隆盛の時期の考察を行うことにより、ものを書く、人と情報を共有する、社会的正義を考える、幸福感を追求するという、広く共有されるであろう現代的関心につながる問題を、出版文化が変化しようとしているこの時代に考察するので、現代の私たちの行動や考え方を理解する素材を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：This research project has attempted to understand the widely shared inclination of the eighteenth-century people, that is, the overwhelming urge to share their life stories by analyzing the characters in literature largely in print and by examining the individuals who have left personal records mainly in manuscripts. Its focus is on happiness that is to be obtained after one's narrative is heard and through negotiations supported by fairness and justice. Although my main sources have been the manuscript letters and records left by Margaret Georgiana, Countess Spencer, my research has found increasingly that Samuel Johnson is another central figure. And interests in him have led me to have a look at his influence on the Japanese literary society early in the twentieth century. The venues of social interaction including letters, the tea tables and pleasure gardens can open up questions to ask now, about personal though public writings on the internet, cafe and social gatherings.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 18世紀 正義 幸福感 書簡 文化の継承 逸脱と寛容 仲間意識

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

18 世紀研究においては、マッキオン (Michael McKeon) の研究(1987、2005)に代表されるような学際的な視点をもった文学研究が従来より充実した成果を挙げてきている。そのような、広い視野をもつ一方で、テキストの緻密な読みに拠って説得力をもつ優れた学際的研究を範として、本研究は、18 世紀英文学の中でも、小説を対象とする研究にベースを置いた。小説は、多様な形式や価値観をとりこんで、自己と他者、私と公、人と物、あるいは心情と物品といった対立する概念の関係を表現する新たな手段となり興隆していったジャンルとしての位置づけをもつ。そのようなジャンルの研究を踏まえ、主に女性の生活の日常を記した手紙や日記などの記録を使って、記述者本人及び読み手にとって、人生の物語がもつ役割 (内省や自己存在の確認、自己正当化の欲求、公正な判断の希求、そして幸福感獲得の経路と言えるようなもの) を考察することを目指し、文学研究の発展に貢献するものとしての位置づけを考えていた。

2. 研究の目的

人生の物語を共有しようとする行為の文化的意味を考察することを大きな目的とした。

人生の物語は、人の行為と、時代あるいは個人の理念と、個人の感情の焦点となり、人生の物語を語ることは、それらを明らかにすることである。18 世紀に際立って用いられた個人の人生の経緯を伝える語りとそれが要求する社会的正義に着目し、人生の物語と正義の価値観のレトリックを分析することを試みた。

18 世紀英文学研究を核として、手稿資料と出版物の綿密な分析に基づいた視点をもち、個人の経験とそれを共有しようとする志向に関わる問題を取り扱う研究とした。これは、現代にも通ずる問題である。時代や地域の特殊性を認識しながら、時代と地域を超えて、今の自分たちにも関わる点を探ることも目的の重要な部分とした。

3. 研究の方法

本研究の核になるのは、18 世紀から 19 世紀初頭に出版された文学作品と、スペンサー伯爵夫人 (Margaret Georgiana, Countess Spencer, 1737-1814) 周辺の人々が残したマニユスクリプトの分析である。そのために、以下の一次資料を精読し、研究書を参照した。1) スペンサー伯爵夫人が書いた日記・手紙・家政記録 (主に大英図書館と Chatsworth House 蔵、娘との書簡は一部出版されている) 2) 彼女が友人からあるいは請願者から受け取った手紙、3) 彼女の周辺の人々の手紙・日記、4) 彼女の周辺の人々の著作、その人々が読んでいたと考えられる著作、5) 彼女及びその周辺の人々に関して書かれている伝記や芝居、6) 18 世紀・19 世紀の文学・歴史・文化に関する論文・研究書、7) 18・19 世紀に限らず、文学一般や手紙の役割、書くこと、社会的正義を論じた研究書。

また、研究の過程で、スペンサーと親交のあった俳優ギャリック (David Garrick, 1717-79) の手紙や、その師でもあった文壇を代表する作家ジョンソン (Samuel Johnson, 1709 - 84) の手紙や著作を通じて、人が集う場における人間関係の構築と知識人の役割に関する記述に注目することになった。なかでも、茶の文化に関する研究書から、20 世紀前半の日本人医師の著作を読むことにより、視野が広がった。その医師の著作中で、ジョンソンが重視されている部分がある。

国内及び海外で口頭発表を行うことと、学術論文として発表することに努めて、理解と考察を深めた上で、広く成果を発信すべく書物としてまとめられるように準備を進めた。

4. 研究成果

文学作品の分析については、社会的正義と幸福感を主軸に、物語の共有のしかたを個人が自らの人生の経緯を手紙などにより吐露することに並んで、複数の人物による会話のやりとりを媒介としたダイナミックな共有のしかたについて考えた。いかに個人的な誠実さを確保するべきかと共に、いかに礼儀を尽くして良き人間関係を維持するかという、時に齟齬が起こる問題に着目し、個人の幸福感と社会的正義を考察した。文学作品のなかでは、特にセアラ・フィールディング (Sarah Fielding, 1710 - 68) とジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775 - 1817) の作品のなかの語り手と情報提供の受け手に注目 (項目「5. 主な発表論文等」に挙げた論文等の中で、主にこの件に該当するものは、[雑誌論文]、[学会発表]、である。以下括弧内同様) すると共に、より広い関心をもって、物語の共有のしかたの一形式としての文学作品の朗読についても考えた ([雑誌論文]、[学会発表])

人々が接近し、情報を与え、あるいは互いに情報を交換し、文化を学び、そして新たな文化を創っていく場として、手紙や手稿の冊子 (書物として出版されたものとは別に、家庭で保管された手書きのノートブックのようなもの) と社交の場を選んだ。手稿については、一貫して関心をもち、考察を発表してきている ([雑誌論文]、)。社交の場では、娯楽庭園と茶がつくる交際場、そしてチェスの対戦の場を選んでそれぞれ論考を発表した ([雑誌論文]、[学会発表]、)。ヴォクソール庭園 (Vauxhall Gardens) についての小さな論考 ([雑誌論文]) においては、18 世紀のイギリスでの商業娯楽施設は、単に金銭を代償に人々に娯楽を与える施設としての役割だけでなく、王侯貴族から平民まで集うことができる平等性をもちつつ、一方で王侯貴族の臨席を利用して場を特別なものにし、自国で芸術を培うための仕組みを提供する枠組みとして機能した。平等性と特別扱いの絶妙のバランスで

人々に幸福感を与えた施設であったが、18 世紀末から 19 世紀には、創意工夫という成功の理由であった志向が皮肉なことに経営を圧迫する事態となっていき、閉園となった。

スペンサー伯爵夫人の記録から、寡婦となった後の状況に焦点を絞って研究を進めた。2016 年 1 月の英国 18 世紀学会 (British Society for Eighteenth-Century Studies) の年次学会において、学会テーマが「成長、拡張、収縮」('Growth, Expansion and Contraction') であった。家族の拡大と繁栄、子どもが独立していった後、そして特に女性の場合、寡婦として残された場合の生活の縮小は、学会テーマに合致したので、未亡人に関する 18 世紀のアドバイス本、文学作品、そしてスペンサーの記録をもとに、口頭発表を行った ([学会発表])。

20 世紀前半の日本の医者が、18 世紀英文壇を代表するサミュエル・ジョンソンをどのように評価していたか、それを通じて古典の教養と新しい科学的知見を知識人がどのように使っていたのか、また、傑出した人物を単なる「奇人」ではなく社会で受容される博学の文化人として位置づけるのに貢献したものは何であったのか、個人の満足と社会での受容について考察した論文を投稿した。この論文は、20 世紀前半の日本人医師・文筆家のジョンソン称賛から、共有される文化的基盤としての古典の教養と文人の飄逸さの社会での受容・評価を論じたものである (未刊)。

2017 年 1 月の英国 18 世紀学会のテーマ「友と敵」(Friends and Enemies)に合わせて、大英図書館で読んだ手稿資料にあらわれた記述を参照しつつ、18 世紀の文学におけるシェイクスピア作品の利用 (教養の一部であり、共有される知識としての文学作品、そして時代により変遷する関心) を特に『オセロ』のイアーゴのような友を装う敵に絞って考察した。そこで得られた視点から、友であること (friendship) に関する考え方の変化は、今後さらに注目すべきだと考えている。なぜなら、困難に見舞われた際に (敵との戦いに準えて) 助けの手を差し延べ、人を支える騎士のような友という存在は、理想や物語のなかの登場人物の関係として共有され、理解されている一方で、そのような友をもつ人間関係は実際にはほとんどありえず、現実の生活や教育書での「友」は、18 世紀に盛んに交わされるようになった手紙を互いにやりとりする相手として、そこで互いの秘密を共有する相手として認識されているからである。「友」は騎士的奉仕の担い手から、秘密の守り手に、つまり情報管理に重点が移っているのである (論文集収録の一章 [図書])。ダラムでの道徳観を焦点にした学会で発表した論文では、小説と個人の記録をもとに、個人の思考や人の意識的努力への信頼と、主観的見解への懐疑の間の緊張とその折り合いのつけかたを論じた ([学会発表])。

スペンサーの親友ハウ夫人 (Caroline Howe, 1721 - 1814) との文通を、かなり時間をかけて読んできているが、そのハウ夫人の活動について、2017 年に研究のために滞在したチョートン・ハウス (Chawton House Library) 所蔵の手稿資料のなかで、非常に興味深い詩作を発見した。この詩は、ハウとチェスをする機会をもった兄をもつ女性によるものである。彼女は、そのゲームを文学的民俗的伝統にのせて描写しており、神話や言い伝えの物語の共有と、勝負と正義、ゲーム観戦の緊張と楽しみをうたっている ([雑誌論文])。

アメリカ 18 世紀学会においては、18 世紀の茶を介した社交性 (sociability) に注目した。日本の 18 世紀の表象との比較を通じて、イギリスの茶の楽しみの特質を分析した。これは、旅人と商売という動的な出会いの場での発達と、家庭の中での安定した人間関係の保持の場で発揮される社交性に関する指摘となった ([雑誌論文] [学会発表])。

2019 年の年初のイギリス 18 世紀学会においては、'Transportation, Justice and Creativity' ('流刑、正義、創造') と題して、18 世紀の刑罰、正義と文学的創造性に関する論文を口頭発表し ([学会発表])、それに手を加えて論文とした ([雑誌論文])。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 11 件)

Mika Suzuki, 'Transportation, Boundaries and Creativity' 『アジア研究』14 (2019): 3 - 7. 査読なし

鈴木実佳, 「チェスと社交」『人文論集』69-2(2019): 151 - 160, IX. 査読なし

鈴木実佳, 「文学の力・教室の限界と可能性」『日本英文学会第 90 回大会 Proceedings』(2018): 103-04. 査読なし

鈴木実佳, 「学ぶ・教える・オースティン」『人文論集』69-1 (2018): 77 - 88, V. 査読なし

Mika Suzuki, 'Tea and Different Kinds of Sociability' 『アジア研究・別冊 7: 東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究』(2018): 41-52. 査読なし

Mika Suzuki, 'An Explorer and Japanese Gardens' 『アジア研究』No. 13 (2018): 19-24. 査読なし

鈴木実佳、『13歳の女の子へのプレゼント』『人文論集』68 - 2 (2017): 75 - 84, IV。

査読なし

鈴木実佳、『主観と努力とオースティン』『人文論集』68 - 1 (2017): 71-82, IV. 査読なし

鈴木実佳、『園芸と日本とジェイン・オースティン』『人文論集』67 - 2 (2017): 65-73. 査読なし

Mika Suzuki, 'Tea for a Medical Doctor and Man of Letters' 『アジア研究』No. 11 (2016): 29 - 34. 査読なし

Mika Suzuki, 'An Entrepreneur and the Public Gathering Venue in the Eighteenth Century', 『人文論集』66-1 (2015): VI, 101-16. 査読なし

〔学会発表〕(計 9 件)

Mika Suzuki, 'Transportation, Justice and Creativity' Panel: Isolation – or worse – by jury: Penal Transportation and Execution, The British Society for Eighteenth-Century Studies 48th Annual Conference: 'Islands and Isolation', 4-6 January 2019 at St Hugh's College, Oxford, UK.

鈴木実佳、『文学の力・教室の限界と可能性～朗読会の実践報告と課題』日本英文学会第90回大会 2018年5月19日20日。

Mika Suzuki, 'Public Sociability, Open Sociability', The American Society for Eighteenth-Century Studies Annual Conference 22 - 24 March, 2018, Orlando, US.

鈴木実佳、『教えること・学ぶこと・展望 - 'that sanguine expectation of happiness which is happiness itself'』『教室のオースティン』日本オースティン協会第11回大会 2017年6月24日 於： 摂南大学寝屋川キャンパス。

Mika Suzuki, 'Personal Strife, Morality and Justice', Moralities in the Long Nineteenth Century, Centre for Nineteenth-Century Studies One-Day Conference on 18 February 2017 at University of Durham.

Mika Suzuki, 'Friends and Hidden Enemies', Panel: Public and Covert Enemies and Spies in State and Society, The British Society for Eighteenth-Century Studies the 46th Annual Conference, 'Friends and Enemies' 4-6 January 2017, St Hugh's College, Oxford, UK.

Mika Suzuki, 'A Doctor at a Crossroads', Medicine and Modernity in Asia, The Eighth Meeting of the Asian Society for the History of Medicine, 30 Sept – 1 Oct 2016, Academia Sinica, Taiwan.

Mika Suzuki, 'Women, Prosperity and Reduction in the Eighteenth Century' Panel: Women at the Margins, The British Society for Eighteenth-Century Studies 45th Annual Conference: 'Growth, Expansion and Contraction' 6-8 January 2016 at St Hugh's College, Oxford, UK.

Mika Suzuki, 'MOROOKA Tamotsu (1879-1945): A Medical Doctor, Man of Letters' At the 14th ICHSEA, 6-10 July 2015, Paris.

〔図書〕(計 1 件)

鈴木実佳、『セアラ・フィールディングの『デルウィン伯爵夫人』と18世紀の友・敵・

洗練』『十八世紀イギリス文学研究6：旅、ジェンダー、間テキスト性』 日本ジョンソン協会編（東京：開拓社、2018）， pp. 110-25. abstract: 228-29. 査読あり。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

[http:// web.thn.jp/mikasuzuki/](http://web.thn.jp/mikasuzuki/)

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。